ある天気予報士への手紙

常磐　誠

一・最初の話

産まれたときからでかかった。四千グラム越えは当然のことで、中三初日で百九十近い背丈をしていればそれは当然目立つだろう。

だが運動はしていない。というか軽い喘息持ちで急な運動やスポーツはできやしない。

「そのでかさマジ無駄だわー」

という幼馴染達の言葉はもう聞き飽きた。……いや、問題はそこじゃない。

そんなんだから、今年の春赴任して来たばかりでいきなり俺等の担任になりやがった百合神（ゆりがみ）に目をつけられて、そしてとんでもねぇお荷物を押し付けられる羽目になったのだ。

「……」

「……」

「……なぁ」

「……」

「なぁおいってば！」

「ハ、ハイ！　わっ、私……ですか？」

「あんた以外に誰がいるってんだ」

「え、えーっと……。そ、う、ですよね？」

「……」

思わず漏れるため息。

「あんた一応先輩なんだろ？　何でそんなオドオドしてんだよ」

俺はギターのチューニングもそこそこに、とんでもなく居心地の悪そうな顔をして怯える相手を見る。

公立の中学校だというのに去年ほぼ一年学校に来れなかったからだとか、事情をよくは知らないがとにかく留年を食らい、一年後輩である俺等と同級生になっちまって、そしてそれらに囲まれて固まってしまっている彼女を見る。すると、

「やだ隆きゅんこわ〜い！」

その後ろから、俺程背丈はないが充分にでかくて威圧感のある男が体をクネクネさせながら言う。吐き気を催す程の気持ち悪さだ。引く。

「あ、……えっ、と……」

こいつも引いてるな、ということだけはわかる。

「かわいいと思います！」
ありえねぇー……。マジに言ってんのかよこいつ。
「ありがとう。わかっているよ！」
とか言いつつサムズアップする百合神。
一回トラックにでも轢かれてまともな思考取り戻してこいや、とか言うと面倒なことになりそうだ。黙っておく。
「気持ちわりー」
「は？　きもいんやけど？」
敬一郎（けいいちろう）と絵梨（えり）がそれぞれに声をあげる。「いやいや。やっぱり年の功だね。瑞穂だけは僕のこの可憐さ、可愛らしさというものがわかっているのだよ。素晴らしい！　はっはっは」
何も気に留めないようにして気持ち悪いデブ野郎こと百合神は笑いながら教室の中心へと入り込んで行く。
放課後の教室、別に何年何組の、とか決まっていない場所を、一年前、二年生の時に俺が勝手に活動場所に決めた。田舎なのだ。バンドの練習場所なんざそう易々と準備できるはずもなく、適当にやっつけで環境を整えた。別に大義みたいなもんはない。あぁ、目標って言った方が普通か。まぁ、ないもんはない。実際、俺等三人のたまり場としての機能も十二分にここは果たしてくれて、ふらっと授業をフケて体育館裏だったり、そしてここだったりに身を寄せたりするのは何となく落ち着いたりもした。
その場所を、こいつは。
「部員四名と顧問一人！　軽音部ここに設立ぅ！」
いとも容易く壊そうとしているのだと思うと、むかっ腹が立って仕方が無かった。
思い返すのはＨＲ。発表は唐突だった。
「見慣れない子が一人いるなぁ、って思っている人もいると思うんだけどさ。中村瑞穂。彼女は去年もここの教室にいたんだよ」
教室は騒然とした。俺は興味がなかった。染め上げた金髪を面倒くさそうにいじっている敬一郎も、ピンク色の髪を同じくいじる絵梨もつまりそういうことなんだろうと思った。
「噂になってしまうのもアレだし、そんでもって隠すようなことじゃないから言うんだけどね」
正直話半分でしか聞いちゃいないから、その続きの事情とかはよくわからなかった。どうでも良かった。
「杜隆、小林敬一郎、菊神絵梨に続く四人目の部員として軽音部作って、そこに所属することに決まっているからよろしくね！」
ここだけは除いて。

「ふざけんな！」
と三人ともが叫んだが、百合神はそれぞれの保護者に話を通し、記入済みの入部届をピラピラと示すだけだった。満面の笑みで。
三人それぞれがこのクソデブに対して、文句と、パンチとおまけに金的の一発でもかましてやろうと意気込んでいた訳であるが、無理だった。
「簡単な話さ。僕は瑞穂の居場所を強引にここに作る。君達には協力をお願いする。その代わり、君達は今まで持つ事のできなかった目標と、そして高校進学に向けた内申等々のポイント、そして貴重な体験を手に入れられる。悪い話ではない。君達はこの学校のお荷物なんかじゃ、ないんだよ」
顔は笑っているがその重圧はハンパなものではなかった。
こいつ、本当に人一人、いや、もう何十人と殺してるんじゃないだろうか。そこまで思えてくるくらいの目だ。
俺達は何も言い返せず、なのに体だけは妙に打ち震えるみたいになって、それでも敬一郎だけは、
「やってられっかよ！　こんなズブのド素人なんかとよ！」
とどうにかして声を絞り出す事ができた。
後から聞いたが、寿命が縮んで、ションベンが逆流して顔にある穴という穴から出たんだそうだ。おもれえ体してんな。お前。
そんな俺等を黙らせるために百合神は瑞穂を俺達の前に立たせて唄を歌わせた。何が始まろうと、俺達は変わらねぇ。もしこいつの歌が上手かろうと、そうそうドラマかマンガみたいな展開があってたまるかと、その唄を聞くまで、確かに三人ともそう思っていた。
その歌声は本当に凄まじかった。
売れない歌手がやるちっぽけなライブ。それでも上手い歌手は山ほどいる。そのことを俺は知っている。
けど、瑞穂はそれを凌駕していた。軽々と。響く歌声に、俺達の動向を見てにやつく野次馬共が、廊下で活動している運動部の連中が、違う階で活動しているはずの連中が。時に音の大小なりで小競り合いをするような吹奏楽部の連中が。
百合神の言う部室――俺達のたまり場――に、ぞろぞろと雁首揃えて集まるのだ。異様な光景に、俺達三人共が固まり、声を失った。そして同時に、俺の頭の中でかつて抱いたちっぽけな夢の光景が広がって来るのを感じた。
できるかも、知れない。
「俺等三人でデビュー、とか？」
「できると思ってんのかよ？」

「無理に決まってんだろー」
「だよなー」
「ハハ！　ムリムリ！」
そんな風に去年、敬一郎と一緒に簡単に笑って、掃いて捨てたような夢。でもそれが、四人でならば。……できてしまうかも、しれない。が、瑞穂が歌ったのは、ガーゴン、祈りのテーマ。それもアカペラで。
それからしばらく瑞穂は教師陣からも『ガーゴン姫』と呼ばれ続けることとなり、その度に赤面する羽目となった。そんな好きか。ガーゴン。子ども向けアニメじゃねーかよ。もう一度聞こうか。そんな好きか。ガーゴン。

二・私も嫌いです！
百合神はウザくて、そして自分勝手だ。でも、瑞穂はやっぱり教室の中に居場所を作るのが困難な様子で、そりゃそうだ。ダブって二回目の三年生をやっているような、そして周囲に溶け込もうと簡単にできるような外交的な性格、というかキャラを持ち合わせちゃいない瑞穂は、どうしたってお客さんになってしまう。
それでもどうにかこうにかやっていけているのも、俺達シードルが傍にいてやる事で、――元々浮いている俺達の傍にいさせることで。――クラスの余計な発言を抑え込み、そして孤立もさせないという百合神の作戦に俺が嵌めこまれているから、だ。
正直、厄介事以外の何物でもないこの存在は、でも何故か俺にとっても放ってはおけない存在になってしまっていて、気付いた時には俺は瑞穂にギターを教えていて、シードルの中での居場所を分け与えてしまっているような感じになっていた。
シードルは基本的に作詞作曲共に俺がやっていて、時々絵梨なんかも、やったりする。そして、楽曲に合わせてボーカルや演奏する楽器を変えている。その中で瑞穂は元々弾けるピアノと、俺が教えるギター。あと、敬一郎にベースを教えさせて、歌は問題ない。そう考えていた。敬一郎？　あいつはネタ曲担当だ。決まってる。
ところが、それはあまり上手くいっていない。何故かというと、敬一郎と絵梨は部活に来なくなってしまったのだ。
敬一郎は俺とは幼稚園からの付き合いで、小学校五年の時から金髪だ。つまり染めたっていうことだ。染めたことがわかった日に敬一郎は遅刻してきていたし、家族も通り一辺倒の反対はしたんじゃないかなと思う。もっとも、もう既に学校で浮いていて、誰も本気で叱り、髪を黒く染めたりするような方向へ諌めたり、実力行使に動いたりする存在がない学校生活を敬一郎が送っていることを見抜けてなくて、そしてそれを学校に押し付けようとした時点で俺は敬一郎が家族から見放されている、と感じるには十分だった訳だが。

きっかけは、算数が人並みはずれてできなかったこと。算字障害、とでも言うのだろうか？　その兆しみたいなものが見て取れたとかどうとか、俺の耳にも入ったことはあるが、

「ま、どーでも良いね、んなこと」

と本人も言っていて、そしてずっと学力的には低空の低空。ド低空飛行を続けていて、授業の妨害はお手の物。教師に嫌われ、クラスメートに疎まれ、家族の中ではまずばあさんに疎まれた。三つ年下の弟は逆に出来が良すぎる位良いものだから、このばあさんは弟ばっかりを可愛がるようになった。

父親は、俺もまともに顔を思い出せない。家にいないのだ。

稼ぎは良いらしい。確かに、俺達の中でも断トツに良い家、良い暮らしをしていて、実はバイオリンを習わされていた時期があった敬一郎は、今でも暇つぶしと称してバイオリンを弾いていたりもする。

勉強だけでなく、知能テストも。スポーツも。そして、このバイオリンも。全て弟の出来が良すぎるもので、敬一郎は、暇つぶし以外で、何かをしない人間になったように思う。

「人生ってつまんねーよな」

が口癖で、そりゃあそうだよな。三つも年下なのに、何もかも身近に自分より上な奴がいて、周囲はそっちばっか向いてるんだもんな。

「あぁ。人生ってくそつまらねぇよ」

俺も合わせてそう言うのが日常の一コマだ。けど多分、それは八割くらいなもんで、二割はこいつ本人の問題もあるんだろう。この二割は、本人に言うと不機嫌になるから、皆避けているが。

ただ、家庭の中で、ばあさんが言うのだそうだ。

「嫁のしつけがなっとらんから、こんなのができるんだ」

ってさ。嫁だから頭下げてすみません申し訳ございません言うしか、ないから。そんな母親を見ているのって、嫌だな。ぶっとばしたくなんねぇの？　と聞いたら、

「あぁ？　……まぁ、精々あいつの目の前で椅子を蹴倒すくらいかな。あんなババアぶっ殺したって、何の価値もねーっつーの。だろ？」

俺に同意を求められても困るし、俺はお前へタレな、としか返さなかった。

「うっせーよ。そのたんびたんびに、一体母親はどんな躾を、とかぼやく耄碌ババアがぶっ殺したくなるくらいには不愉快なだけさ」

学校でも、家でも、敬一郎や絵梨はお荷物で、いらない存在だと言われて生活していた。家じゃともかく、学校で同じく言われてる俺も、まぁ同じ穴の狢な訳だが。

例外の瑞穂は俺達に亀裂を入れることに繋がった。

そんな敬一郎を焚き付けて、変えたのは百合神だった。敬一郎はすぐ百合神の説得に乗

せられて帰ってきて、そしてベースをいじりだしたのだ。しかも、頼んでも無いのに瑞穂に教え出したりなんかして。

「良いんだよ。どーせ今の俺はお荷物、なんだし。好き勝手にやらせてもらうさ」

とか言っていたが、そんな敬一郎の姿に瑞穂も感化されて、かなり二人の熱は高まっていた。

当然、百合神は絵梨にも同様の焚き付けを行っていたが、それでもあいつはたまり場に来る事はなかった。別の理由でもあるのかねぇ、などと言う百合神は呑気なもんだった。

絵梨は昔から素直じゃないというか、跳ねっ返りというか。そういう人間に見える。ただ、見えるだけであって、実際にそういう人間なのだと言おうと思うと、奥底から絵梨という存在はそんなに単純じゃないってことに気付かされることがある。

まず絵梨は関西弁を使うが実際あいつは関西には行った事すらなく、地元生まれの地元育ちだ。

じゃあ何故？　という当然の疑問が生まれるがその答えは俺のお袋だ。絵梨はお袋の真似をしているのだ。

昔からどこかズレた発言をしてしまったり、考え方が特殊だったのだろう。俺も一回だけ聞いたことがあるが、

「あの子とは遊んじゃダメよ」

「あの子は、少しおかしいから」

という周囲の大人達の言葉。それらはまさしく毒で、聞かされた子供は絵梨に近づけなくなり、言われた絵梨は弾かれて、省かれて、いつの間にかズレたまま、そして周囲に対する攻撃性だけ保ったまま、来てしまう羽目になっちまった、という訳だ。そんな折に俺のお袋がどういう訳か関西弁で怒鳴り散らす様を見てしまったらしく、それがまるで悪を張っ倒すヒーローにでも見えてしまったのだろう。それ以来あいつはお袋の真似で関西弁を喋るようになった。

俺達からすれば単なる偶然なのだが、ただでさえ『おかしい』娘を、余計におかしくした親子になっちまう訳で。そういう訳で俺達親子は絵梨の母親とは折り合いが悪い。まぁ、俺からすれば知ったこっちゃないんだが。

精々言えることがあるとするならば、あの関西弁は絵梨なりの一生懸命、っていう奴なんだと思う。倒れず突っ張り続ける為の、一生懸命。

閑話休題、というものになるか。そんなこんなで部活に顔を出さなくなった絵梨を変えたのは、何と瑞穂だった。今までずっとどこか年長者という風に線引きをしていたように感じられる態度ばかりだったが、絵梨に対して自分なりのアクションというものを起こし始めていたのだ。

「隆君からギターやベースを教えてもらって行く内に、できる様になっていって、それを今度は絵梨さんにも伝えたいって思うんです」

と言っていた。要は、楽しさを伝えたいって奴だろうと理解した。……まぁ、意味ないだろうなって思って、けど言えなかった。あまり乗り気でない俺の顔を見ていると、それをやめるだろうと、そう思った。こいつはそういうのにすごく敏感だっていうのを指導中に何度も感じていて、そしてそういうのにかなり素直に、というか、従順と言って良い程に従う人間だったから。

ところが、だ。瑞穂は部活が終わった後に毎日毎日絵梨の家に行き、会おうとしていたのだ。家族と仲が悪い絵梨が家に寄り付く訳が無いのに。

絵梨の家族からも疎まれてしまって。それでもなお挫けない。かなり冷たく当たられてもなお、一時だけ顔を伏せても、決まって五秒くらいで顔を上げ、そしてその後は顔を下げなかった。むしろ晴れやかに笑っていた。雨の振る日には、何かのまじないだろうか。必ず傘をくるくる、と回して、顔を上げたら、笑顔のまま。もう下げなかった。

そんなものを見せられて俺もどうかしちまった部分っていうのがあるんだろう。もう一つの俺達のたまり場を教えてしまった。

売れない歌手だったり、地元からデビューしたいと思っていたりする連中がライブをすることができるようなちっぽけなステージを備えた喫茶店。俺や絵梨は学校をサボったりした日なんかにここで演奏をしていたりもするのだ。つまり、絵梨も楽器の腕には覚えがあり、瑞穂が感じ始めた楽しさ、なんていうのは、とうの昔に味わいきったものなのだから、意味が無いと思った訳だ。

絵梨が俺達三人――いつの間にやら敬一郎まで合流していやがる。意味が分からない――を見付けると、あからさまに瑞穂を見て嫌な顔をした。その気持ちが理解できないではなかった。絵梨が言い放つ。

「わいはアンタみたいな女がホンマに好かんねん！」

要はズブの素人で、学年も――本来なら――違って、そして今まで何の交流もなかったような女子が、俺と楽器で交流を持つ事が、それもヘッタクソな腕前で交流を持つ事が許せない、ということだ。

その気持ちに拍車をかけたのは瑞穂が俺達と大きく違う部分、不良であるか、その逆の委員長タイプか、という部分だった。

今は俺や敬一郎、それとマスターがいるから良いものの、いなかったらもう絵梨は手足を出していることだろう。それほどまでに感情を露にしている絵梨に対して、先生もマスターもすごく冷静だった。

先生は絵梨が来てすぐマスターから一報を受けてコソコソと様子を見ていたそうだ。と

んでもないストーカーもいたもんだ。
アンタみたいな女がホンマに好かんねん発言から空気が凍ると同時に、
「にゃにゃっにゃにゃーん！」
と緊張感の欠片もない登場をしたかと思えば、マスターと一緒に、
「そういう喧嘩は楽器でやりたまえ！」
とぬかす。色々と問題が大きくなるかと思っていた俺と敬一郎だったが、絵梨も瑞穂も、それぞれに楽器を準備したのだ。
「ギッタギタにしたる！」
と直接口にした訳ではないが、そういう気持ちが露骨に伝わるような演奏。何より、まだ瑞穂に教えていない、というか教えてもできないようなコード、奏法をバンバン織り交ぜて音を表現する絵梨の音楽は、刺々しく、荒かった。
一方の瑞穂は、簡単なコードだけで、時折間違えたり、詰まったり、止まったりしながら、思い思いの音を奏でる。全く教えた訳でもないのに、何故か絵梨の刺々しい音を柔らかく包み込むようにして、和らげていくように感じられた。
「なぁ……。お前瑞穂ち……さんにあんなことまで教えてマスターさせたのか？」
敬一郎は信じられない、という顔で俺に尋ねてくる。
「んな訳ねぇよ」
答える俺も、本当に信じられなかった。
「フンッ！　上手い下手はハッキリわかるやろ！」
いつまでもケンカ腰の絵梨だったが、
「でも、楽しかったですね」
と言って無邪気に笑うその問いかけに、
「……いつまでも言ってろや」
毒気を抜かれていた。そしてその次の日の昼休み、絵梨を呼び止めた瑞穂の、
「昨日言い忘れていました！　私も嫌いです！」
という訳の分からないタイミングかつ訳の分からない内容の言葉を全員で笑ったことを契機にして、絵梨も部活に戻る事となった。そしてなぜか、その時には学園祭の中に組み込まれている――というか、百合神がねじ込んだのは明らか――ライブという目標を、誰も馬鹿にしたりしなくなっていた。

二の余談・ほのかな茶色、のお話

瑞穂が絵梨の家から引き返したりする時なんかに、ふっと頭の中に蘇るモノを感じていた。

そういえば、あの女の子もこんな感じで。髪の毛の色が少しだけ茶色だったな、なんて。デジャヴュなんてそうそう珍しい話でもないか。別段深く受け止めはしなかった。

金髪に染めて一生懸命に不良を演じる敬一郎が、俺の背中を押しながら急かす。そうしている内に、俺もまたこのデジャヴュをふわふわの内にまた落とし込み、溶かし込んでしまうのだろう。

さようなら。また会う日まで。……きっと、そういう日が来るなんて、夢にも思いやしないんだけどさ。

三・暗雲

詳しい事情は知らない。ただ、この世に生まれてくることを祝福されない命なんてごまんとあることは俺でもわかる。

それくらいのことはわかるから、だからこそ。俺はその時『セックスってもんは相当気持ちの良いもんなんだろうな』と思ったんだ。

学園祭のライブに、俺達の親が見に来る事になっていたことを俺は、というか全員が当日、出番の直前になって初めて知った。当然言い出しっぺは百合神先生な訳だが、一番ノリノリで周囲を巻き込んでいったのは俺の母親だった。

俺を産んだ母親は俺を産んですぐ夫、つまり俺の父親にあたる人と一緒に事故で死んだという。今の母親は産みの母親の妹で、一族のお荷物、面汚し、ゴミクズ……まぁ、色々な呼び方で蔑まれてきた人だった。ちなみに当時付き合っていて、籍も破れかぶれに入れてしまった男は借金だけを残して東京湾に沈められたとか何とか。まぁ要はそういうこと、らしい。そんな奴と付き合っていたお袋の状況も、お察し。という奴だ。そんなお袋がお袋の弟――俺の伯父――の手引きを受け、まだ産まれて間もなかった俺を抱き実家を飛び出したことでお袋は俺の母親になった。

俺がこの事情を知ったのはつい先月のこと。知ったばっかりで、まだ何となく飲み込めてない部分だとか知れてない部分もあったりはする。するが、でも、こういう事情があったからこそ、恐らく、いや、絶対。お袋は俺の夢を否定せずにいてくれて、そして女手一つ、水商売で金を稼いでくれているのだ。

そんなお袋が敬一郎や絵梨の、そして瑞穂の両親達に会っていき、そして学園祭に来る様に説得をしていったという。

幼稚園の頃からの付き合いだった敬一郎の親はまだ余裕だったが、絵梨の母親とは折り合いが悪いもんで苦労したとか、ライブ後に聞いた。というか母親は来なかった訳なのだ

が。
それでも父親の方が、『惚れた弱み』とかいう訳の分からない理屈をつけて来てくれた。
「うるせー。くせーんだよジジイ！」
絵梨の方はそんな悪態を吐いたりしていたが、まんざらでもない様子だった。
敬一郎の方は親子間にできた溝、というものがこの時は上手くはまらなかったか、会話は続かず、気まずい空気ではあった。それでも、来ただけマシだ。そう。……来ただけでも、マシだ。
「きっと、忙しかったんやろなぁ」
笑顔で瑞穂を励ます様にお袋は言うが、それは本当に御為倒し、というか、要するに励ましているつもり、という状態に他ならない感じの声かけだった。
「……えぇ。きっと、そうだと思います」
瑞穂も笑っていた。その後すぐに後ろを向いたら、顔が下がった。
そして五秒後だ。顔を上げると、やっぱり瑞穂は微笑むのだ。
「楽しかったですね。今までで、一番楽しかったです。隆君も、楽しかったですよね？」

四・雷鳴

瑞穂が留年した理由。気管支の障害。繰り返される発作。一番酷いのが去年の夏の始めの方。梅雨明け頃。生死の境をさまよい続け、そして峠を越えた頃に宮ノ訪の病院で根治の為の手術ができる環境が整ったという。
学校に行けない正当な理由として認められるのだから、卒業しても良かったはずだった。でも、それを親が拒んだ。卒業しても既に受験は終わっていて、行ける高校がない。でも、それ以上に、
「あそこの親は子ども一人まともに高校にやりきらんとばい」
という悪評が立つ事の方を真っ先に恐れたのだという。
ロック、というジャンルで音楽をやっているからかどうかは知らないが、俺は世間体という奴が大嫌いだった。そして、それを真っ先に気にして瑞穂の為じゃなく自分たちの都合を優先する瑞穂の両親どもが、許せなかった。
お袋が情報を集めていた。瑞穂は自分の家族の事を話そうとしなかった。聞くと、決まって笑う。笑って、誤魔化した。しつこく聞いてしまうこともあったが、絵梨か、先生に止められた。
お袋が言う。あの子の母親は産みの母ではないと。でも父親は血の繋がりがあるのだと。なるほど俺と同じじゃないのか。だったら、大丈夫なんじゃないかと思った。だって、うまくいっているじゃないか。俺とお袋の場合。事情をつい最近まで知らなかったけれど、

でも知ってからでも今まで通り、言い合いとかつまんねー喧嘩とかするんだけど、でもうまくいっている。

何故だ？　じゃあどうして瑞穂はうまくいかない。

お袋が言う。瑞穂を産んだ両親が離婚する時、どちらが瑞穂を引き取るか、という点で一番揉めたという。一体どちらが、

『瑞穂（お荷物）』を引き受けるか。という一点で。

揉めに揉めたという。父親に決まった。その時の父親の顔を瑞穂は忘れられないでいるのだと言う。お袋に直接言った。

「まるで、外れくじを引いたような顔でした」

その後、すぐに瑞穂は笑ったそうだ。そして、続けたそうだ。

「仕方が無いんです。私はお父さんとお母さん二人ともの足を引っ張り続けながらここまで来ました。二人はやりたいことをずっと我慢し続ける人生を送ってきました。私はお荷物なんです。でも、それでも私は新しいお母さんと、そしてお父さんの家で暮らす事ができて、とっても幸せなんです。これを恨んだりしたら、罰（バチ）が当たります」

カラン。グラスの氷が立てる音一つ。

「子育てっちゅうんは、我慢なんかやないよ。……いや、我慢だってやっぱあったけどな。ありまくったけどな。……けど、ちゃうやん。そういうもんと、ちゃうやん……」

酒の入ったお袋の声は切なく聞こえて、俺は初めてこの気持ちを、こういう感じを切ない、というのだと、知った。お袋が切ないと思っているのか、それとも俺が切ないと思うから声が切なく聞こえたのか、それはどうでも良い事だが、俺の気持ちがその直後に怒りに変わってしまった事はどうでも良い事ではなかった。

胸は張り裂けそうだった。なんて月並みな表現だ。陳腐過ぎて吹き出しちまう。俺はそういうのを人一倍バカにするクチだった。でも、止められなかった。翌日の帰り道。降りしきる雨の中でついに瑞穂は俺に話してくれた。

瑞穂は新しい母親とうまく行かなかったのだ。いや、母親は、うまくいかせるつもりが端からなかったに違いない。

二人が初めて出会ったその時に出来るだけ印象を良くしようと努めて笑顔で挨拶した瑞穂に対して、

「どうしてこんな鈍臭（ドンクサ）いのを引き受けてんのよ。とんだお荷物じゃない」

舌打ちまじりに発した発言がこれだ。

「仕方がないだろう。施設なんかに預けてみろ。近所から何言われるか」

公務員っていう人種が全てこうだとは当然言わないし思わないが、吐き気がした。

瑞穂は普段家でどんな風に過ごしているのか、扱われているのか、それを言わなかった。

言わなくても、察しがつく。
「お母さん。今日の晩ご飯はポテトサラダを作りますね」
笑顔で瑞穂は母親に話しかける。でも、その母親から声が返って来る事は無い。それでも、明日も、明後日も、明々後日も、その次の日も、今日こそは何か変わるかもしれない。私が笑顔であれば、私が良い子であれば。それを積み重ねて何年も。……なんて滑稽なんだ！　腕が震えだす。今こいつらを前にしたら、ワンパンで殺せそうな気がする。死んで当然だこいつら！　そんな俺を柔らかく包み込むようにして、俺の腕を抱きとめる瑞穂の顔が笑っている。
「大丈夫ですよ。隆君。今日はうまく行く気がするんです。お母さんの好きなポテトサラダ。今日はこの前よりずっと上手に作れます。お父さんも、好物の煮付けをきっと美味しく食べてくれます。旭君も私に懐いてくれているんですよ！」
違うだろ？　そうじゃないだろ？　違うだろう！　問題はそこじゃないんだ。上手か下手じゃない。今の両親の実の息子、旭だって、そうだろ？　もう立派に両親の洗脳に染まって、お前を目の敵にしているのを俺は知っているんだぞ？　もう無理なんだろ？　どうしてそうやって、笑っていられるんだよ。お前、その笑顔で誰を許す気なんだよ……。
「隆君。だから。お願いです。お願いだから……」
瑞穂の声がする。優しい声。許されるような声。歌声に込められるような、あの時、ガーゴン姫って呼ばれるようになったきっかけの唄から、ずっと感じ続ける。聴いている、ただそれだけで、何もかも。そう、何でもが、許されるような、声。

――泣かないで、ください。

五・のち、豪雨。
その日の夜の事だった。季節は秋。思う以上に辺りが暗くなるのはあっという間で、そして唐突だった。瑞穂を送る、という名目ではあるが、実際のところは泣いてしまった俺が落ち着くまで時間を取らせたことの責任を取る、……というと何だかかっこつけになるのだが、そういうことで俺は瑞穂の家まで付いていく事にした訳だ。そうしたら、偶然父親と家の目の前で出くわしてしまったのだ。
思えば最悪だったのは瑞穂からこの両親についての話を聞いたその当日であったことと、そして俺が傘を持ってきていなかったがために瑞穂の傘を俺が持って相合傘をしている、ということだった。相手が相手だ。別にその手のお説教が来る事はないだろう。現になかった。だが、
「フン。母親そっくりじゃないか。あれだけ良い子ぶっておいて、やることはしっかりと

……しているなんてなぁ？」
俺がいるにも関わらず、そんなことを言ってくる事態になっちまったんだ。
「ち、違います！　隆君はそういうんじゃ」
「じゃあ何なんだその相合傘は」
「これは……」
「俺が傘忘れたもんで強引に入れてもらってんすよ……」
もう、遠慮はいらないなって、そう思った。
「ほう？　挨拶するより前にそんなケンカ腰に話しかけてくるなんて、どんな躾されてきたかがよくわかるよ」
ほら。向こうだってその気だろ？　てめぇの子ども一人幸せにしてやれない甲斐性なしだってのがよくわかるよ。
「つーか俺がいる目の前でよくそういうことが言えたもんスね」
「別に。君がどういう子なのかってのは知ってるんでね。有名人の君に、この子がどういう子なのか、親としては説明してやる必要があるだろう？」
それで俺に押し付けようってか？　俺の体がゆっくりと前に動き出す。勢いをつけ、そして殴りつけようとして、それができなかった。
「ダメです。隆君。……ダメです」
瑞穂が俺の体を抱きとめていた。雨に濡れることも厭わずに、傘を投げ捨て、全力で俺を抱きとめていた。体格差を考えると、これくらいしないと瑞穂は俺の歩みですら止められないのだ。
「何でだよ。離せよ。瑞穂」
「ダメです！」
瑞穂の腕に力が籠もっていくのが伝わる。
「あら、お似合いね。……ほんっと、よぉくお似合いよ。あのインラン女に、よぉーっく、似ているわぁ」
瑞穂の今の母親が、合流してきた。そしてその言葉に、その姿に。瑞穂の体が震えだした。
「お、おかっ、お帰りなさい。お母さん」
引きつった声、引きつった作り笑顔でどうにかこうにか引っ張りだした言葉。
「つーかさぁ。アンタ。もういい加減にしてくんない？　そーいう態度、アタシほんっとイヤになんのよ。そういうさ、『私は良い子でーす』ってた、い、ど！」
ヘラヘラと笑いながらこのババアがくっちゃべる。どうにかしようとして、方向はズレにズレまくっちゃいたかもしれないけれど、それでも必死に足掻く瑞穂の気持ちなんて、

途方もない程考えられちゃいなかった。
「もう無理して帰ってくる必要もないんじゃないか？」
父親の声は不思議と優しい響きにも感じられた。
「だってそうだろう？　門限も守れないんじゃあなぁ……」
俺は驚いて瑞穂を見る。それは初耳だった。瑞穂の顔が青ざめていく。
「おい」
「……ません」
俺にだけ聞こえる最後の否定の声。瑞穂は、俺の顔を見て、何かの逡巡を振り切るように俯いた顔を上げ、
「うちに、門限なんてありません……」
そう言った。今度は、どうにか俺一人には聞き取れた。
「ハッタリ、かよ……」
気持ちがまた荒れてくる。だが父親のにやけた顔がまだ止まらない。
「いいや。この時間だ。八時だぞ？　健全な中学生が帰るには遅すぎるだろう。まぁでも皆まで言うな。わかってるさ。あの女に似たこいつのことだ。どこぞの不良に良い様に踊らされてよろしくやっていたんだろう？」
瑞穂の顔が下がる。違うんです。口だけでそう言っているのが読み取れる。その違うんです、は自分のことじゃなくて、たぶん、いや、絶対。俺の事。俺が不良じゃないんだって、こと。自分の事を優先しないで人の事ばっかり許す人の良いバカだから。……だから。もう俺は切れていた。
「ふざけんじゃねぇーーーーー」
手始めに父親の胸ぐらを掴み、家の塀に押し付ける。殴りはしない。こういう奴にそれをしたら、思うつぼだと思った。
反応が遅れた瑞穂が慌てて俺を止めようとして、失敗して、つまづいて、そして転んだ。でも、俺はそれを意に介することができないまま、叫んでいた。
「謝れ！　今すぐに謝れ！」
胸ぐらを掴まれ、そしてもう百九十を越えた俺を見上げながら、それでも父親はにやけていた。
「どうして謝る必要がある？　君はもう私に暴力を振るっている。これは立派な不良の行動じゃないか」
ふざけるな！　ふざけるな！　ふざけるなこの野郎！
「あぁそうだ！　俺は不良だよ！　俺は不良なんだよ。そっちじゃねぇよ！　娘に！　瑞穂にだよこの野郎！」

興奮しているつもりはなかったけれど、妙に息が上がる。ゼエ、ゼエ。息が苦しい。
「血の繋がってない親子なんざ珍しくもなんともないさ。でも、それでも愛情もって育てて親ってのはいるんだ。……しかもアンタ、繋がってんじゃねぇかよ。繋がってんのに、どうして、何で、だよ……？　なぁ、謝れよ。なぁ！　瑞穂に、謝れ、よ……」
腕に、手に力が入らなくなってしまって、瑞穂に、引きはがされる。
「謝って下さい！」
瑞穂は叫んだ。俺に向かって。父親でなく、俺に向かって。
「隆君、謝って下さい。二人に」
背中越しに聞こえる声。俺は信じられない気持ちがして、雨に濡れたコンクリートの上に尻餅をつくようにしてへたり込む。
「どう……して……？」
俺はそれしか言えなかった。
「隆君、早く、謝るんです！　早く」
「だからどうして！」
俺は信じられなかった。俺は瑞穂のために謝れと言ったんだ！　俺のために違うと言ってくれた瑞穂、お前のために俺は！　その気持ちを唐突に裏切って両親の側につくなんて、信じられなかった。
「私の手術に、どれくらいお金がかかったか、隆君わかりますか？」
瑞穂の声は、穏やかさを取り戻していた。でも、顔に、表情に光を、今までのような雰囲気を感じる事が、できなかった。
「それは、少なくとも安い金額ではありませんでした。それを、二人は出してくれました。わかりますか。私のために、出してくれたんです。それは、間違いなく愛情だって、わかりませんか？　隆君」
それはきっと、というか絶対、世間体が理由だ……と言いたかったが、さっき叫んだので体が限界を迎えてしまったようだった。薬を吸い込むのに精一杯になって、それを言う事ができなかった。そしてそのまま、どういう訳か仕事をしていたはずのお袋が駆けつけて来て、朦朧とした頭のまま、俺は引き摺られるようにして帰っていく羽目になった。
「うちのバカ息子が、本当にご迷惑をおかけ致しました」
と母が深々と頭を下げているのを見ると、それだけは本当に申し訳なく思えた。

六・天気予報士

学校にいる間中雨は降り続けていた。今日は流石に傘を忘れたりはしなかった。その雨は、不思議な事に部活が終わって家路につく頃にはもう傘をさす必要がないくらいの勢い

になっていた。これならさす必要もねぇな。と俺が独り言を言うと、
「ダメです。隆君は傘をさしてください。私もそうしますから」
と瑞穂が話しかけてくるのだった。
「お前だけ勝手にそうしてろよ」
俺は瑞穂のことを気にしないで歩き出した。敬一郎と絵梨は、どういう訳か学園祭の後から俺と一緒に帰らなくなった。どういうつもりかってのはわかっている。全く、余計なお節介なんだよ。あぁ、ったくよ。
「あ、待ってください」
瑞穂が小走りで追いかけてくる。そしてつまずく。あっ、という声が聞こえてきて、バランスを失った体を俺が支えた。
「ごめんなさい……。気をつけます」
反省したような、しゅんとした顔を見せながら反省の弁を述べる瑞穂を、やっぱり見ていられないような気分になって俺はすぐにまた歩き出す。別に急いでいる訳ではないが、歩幅の関係上、どうしても瑞穂のことを置いていってしまう。でも、それも気にせずに歩く。
「ま、待って、ください。隆君」
どうしたって最終的には小走りになる瑞穂が、少しキツそうにしていて、流石にどうかと思い、足を止めた。
「あの」
「何」
「……」
「あんだよ。ハッキリ言えよ」
ついつい急かしてしまう。
「あの、ごめんなさい」
「何が」
特に謝られるようなことはされていない。つっけんどんに返す。
「でも、えっと、まず一週間近く学校を休ませてしまって、本当に申し訳ないです……」
「別に、あれは俺も無理をし過ぎたってだけだし。それにお前の方だって、二日休んでるだろ」
「はい。でも、やっぱり隆君の方が……」
「別に俺は構わねぇよ。それよかお前、その二日はしっかり休めたんだろうな」
俺は確認する様に問いかける。あの後、お袋から思い切り殴られ、怒鳴られた。まぁ、当然の事だ。

「呼び出してくれたんは百合神先生の友人の方や。出張してた百合神先生にも迷惑かかってんねんからな！　しっかり感謝して謝っとけやこのボケ息子！」
という説教の最後をしっかりとっぷり頂いてから、俺は寝込み続けていた。勿論医者からも大説教ときたもんだ。めんどいことばっかりだな。ギターにも触れさせてくれない。まったく、めんどいことばっかりの世の中だ。
じゃあ、瑞穂はどうだろうか。聞かなくてもわかる。二人から、いや、旭まで入ってしまえば三人からか。詰られた事だろう。散々に、苦しい言葉を浴びせられた事だろう。そしてそれでも、瑞穂は笑っていたことだろう。言われているその時はともかく、また五秒たったら瑞穂は笑うのだろう。……笑っていたのだろう。いたたまれない。とことんめんどいことばっかりだ。つくづく、めんどいことばっかりの世の中だ。
「隆君、今日は私を避けてます」
瑞穂が、俺の学ランの裾を引っ張りながら呟く。俺に伝えようとしているのか、それとも独り言なのか。めんどく思うから、頭を掻きながら、
「別に避けちゃいねぇよ」
「本当ですか」
「あぁ本当だよ」
「じゃあ何で今日一日私に向けて笑ってくれないんですか話しかけてくれないんですか部活だって私と先生が呼び止めなかったら逃げ出してサボっていたんじゃないんですか？今日の隆君はいつもと違います。変です。大変（おおへん）です」
いつものゆったりした声とは真逆の、早口にまくしたてる瑞穂の口調。大変って何だ。勝手に言葉を創り出すなよ。
「別に変じゃねぇ。大変（おおへん）でもねぇ」
「本当ですか？」
「あぁ。……ただ」
「ただ？」
瑞穂に裾を摘まれたまま、俺も瑞穂も歩みを止めていて、雨上がりの通学路、足下のタイルを見ていると、不思議な感覚があった。まるで、二人きり、誰も人がいない田舎の歩道で時間が切り取られて、止まる事はないのに、ずっと時間が切り取られたまま、不安なままで、ふわふわとしたままで居続けるような。居心地の良く、そして気持ちの悪い感覚。瑞穂は俺の返答を待っている。これは、一種の賭けだとも思えた。一体どちらの？　それは多分、双方共に、だと俺は思った。
「この前……さ、あんなになって、お前にも散々迷惑かけちまって。……その、何だ……」
「私も、……あんなに酷い事を隆君には言ってしまって……。ずっと、謝ろうって……思

っていました……」
瑞穂もぽつり、ぽつり、と声を落としていた。謝るようなこと、こいつは言っていないのに。
「お前の言っていることは、正しかった」
「……え？」
瑞穂の顔が上がって、またきょとんとする。
「百万とか、そんくらいはするんだよな。多分、だけど」
「……はい。その他の、例えば入院費だったりとか、私が体を動かせなかった時期の食費だったりとか、そういうのを入れたら」
「つか、そもそも俺が家で飯食ったり風呂入ったりすることとか考えたら、さ」
「……はい。そうだと思います。もっと、かかってます」
瑞穂の声は、小さい。だけど、芯が通っているというか、強く心に突き刺さる。あぁ、なんだろうな。このめんどい現実っていう奴は。そこについては、ほんっと、俺等は無力極まりない。どうしようも、ない。
「私、本当はわかっていました」
瑞穂は少し大きな声で、俺を見上げながら言った。ずっと、笑顔だった。
「二人がどちらを引き取るのか、二人きりでは決められなくて。最後は私がどちらに付いていきたいのか、決める事になりました。……わかっていました。どっちを選んでも、選ばれた方は外れくじを引かされたって顔をするんだって。わかっていました。二人とも、表情が必死に訴えてました。
『どうか、お荷物（瑞穂）がこっちを選びませんように！』って。
それで、ですね。私、お父さんを選びました。世間体が大事なお父さんだから。そして寺留実（じるみ）市の職員だから。収入が安定していて、そして貯金があることも知っていました。だから、……だから」
瑞穂は一度言葉を切った。俯いた顔から、表情が読み取れない。
傘がくるくると回って。そして傘が閉じられる。いつの間に、雨は完全に止んでいた。もう一度顔を上げた瑞穂の顔は穏やかだった。穏やかに、笑っていた。
「二人ともがそれぞれに不倫をしていましたから。だから慰謝料の支払いとかはないし、だからいつか手術ができるように宮ノ訪病院の環境が整った時、お父さんは必ず世間体を気にして私に手術を受けさせてくれるだろうなって。私わかっていたんですよ。……そして、実際にその通りになっちゃいました。……えへへ」
瑞穂が俺の裾から手を離して。一歩、二歩、歩いていく。俺の先を、進んでいく。顔が見えなくても、笑っているのが、わかる。だって、いつもそういう風にする奴だから。わ

かる。
「私、猾い子なんです。お母さんの言う通り、『良い子のフリ』をして。でもちゃっかりと利用したんです。お父さんのこと。私、そんな、猾い子、なんですよ。なのに。それなのに。あの日、私本当は嬉しかったんです。隆君は私の為に怒ってくれました。私のために、自分が不良呼ばわりされるのも構わずに私に対して謝れよって、あの二人に言ってくれました。私、嬉しかった……。なのに、それなのに私……」
「もう良いよ。もう良い……。だから、だからさ……」
今度は俺が言ってやる番だと思った。瑞穂の後ろ、手を伸ばせば届く距離。言ってやりたかった。泣かないで、ほしい。って。
言えなかった。
これは家庭の事情って奴だ。触れない方が良い。そうなんだ。無力な俺が触れても、どうしようもないことなんだって。左手が右手を抑え込んで、右手の震えを、必死に誤魔化している。なっさけねぇ。俺はどこまで情けないのだろう。ぽたっ、て、右手の甲に水滴が落ちて、また、雨が降ってきたのか、って思って、
「……あれ？」
俺は、どうして泣いているんだろう。何故、瑞穂じゃなくて、俺が泣いているんだろう。
「隆君。……ゲームをしましょう」
瑞穂の誘いを聞いた時、その突拍子のなさに、
「……へ？」
自分でもそんな素っ頓狂な声に、軽くビビった。俺、こんな声で返事とかすること、あるんだなって。
「いつも、敬一郎君と一緒にやっている遊びですよ。今日は、私とやりましょう」
瑞穂はもう、笑っていた。
足下の歩道は、丁度今いる所から、俺達シードルの面々が別れる丁度そこまで、決まった色のタイルが敷き詰められている。赤、白、黄色、青の四色。この四色で場所毎に様々な模様が作られている。白鷺、河、その道沿い一面に咲く菜の花による黄色の絨毯、工業地帯。寺留実（じるみ）市の特色を謳う様々な模様。そのタイルを、参加者がそれぞれに決まった順番で踏んで歩く。ただ、それだけのルール。
それが意外と難しくて、小学校一年の頃から敬一郎とルールを決めて、やり始めて中々成功できないまま、義務教育の時期が過ぎようとしているのだ。
ちなみに難しい理由は、所々にあるマンホールの扱いだ。
「小学校低学年の時とか、マンホールは落ちて死ぬっていう設定だった」
俺がマンホールの上で一人ごちる。

「マンホールはセーフな。って、男の子が二人で言ってました。丁度私その時五年生でした」
瑞穂が俺の乗っているマンホールに標準を合わせたのを感じて俺は数歩後ろに下がる。当然、瑞穂が乗るスペースを確保する為だ。敬一郎が相手なら当然逆に前に寄る。
「いや俺のスペース無くなんじゃん？」
と敬一郎が言えば、
「良いじゃん。落ちて死ねよ」
と返すのが定番だった。絵梨は飽き飽きしている情景だっただろうから無視しながらも俺等に合わせてベンチに腰掛けていたり、別の何かに目を通したりしながら過ごしていて、そして瑞穂は笑った。
「よいっしょ！」
瑞穂が精一杯に飛んで、勢い余って俺にぶつかってくる。それを支えてあげて、
「ありがとうございます」
「良いって事よ」
っていうやり取りも、これで三回目を数えた。
例えば河の絵になっている箇所では赤色どこにあんだよって感じで、数が極端に減る。時に見かける小さな花の描写くらいにしかその色はなく、そうでないならば必死にマンホールを頼る以外に生き残る術はない。
「私は定期的に発作を起こしちゃってましたから、ずっと見れていた訳じゃないですけど、でも二人がそうやっているのを見ていて、あぁ、あの時のおっきい子が今日もやっているなーって、思っていました」
「へー。見てたんだな。俺は全然意識したことなかった」
「えへへ。だって私目立たない事には自信がありますから」
胸張るところかよ。小さく笑う。
「今は目立ちまくれて良かったじゃねーか。不良生徒の中村瑞穂さん？」
悪戯な笑みを浮かべて俺が言う。
「いいえ」
瑞穂が答える。芯の強い返事に俺が少しだけ気圧される。俺が見つめると瑞穂は笑って次の色、白。雲に飛び乗って、言った。
「今は南稜（なんりょう）高校合格目指して頑張っている立派な受験生ですよ。私達みーんな！」
あぁ。そうだったなあ。
かなり自由な校風で、大きな軽音部があって。そして俺以外偏差値的に厳しい南稜高校。全員で受かったら、そこでまたシードル組んで音楽を続けよう、なんて言ってたな。……

そうだった。
「そうだった、な」
「えぇ。そうです、よ」
決まり通り色を踏んで進む。いつしか俺達はまた無言になって。ゲームは後半戦に突入して、いつの間にか俺は笑っていて、そしてふと気付いた。瑞穂は俺が泣いていた事に、気付いたのかもしれないなってこと。瑞穂は俺を笑わせようとしたんじゃないかなって。
そう思って改めて瑞穂を見てみると、瑞穂は笑っている。あぁそうだ。笑っている。
俺の目の前であんなにも傷付けられたまま、何も解決しちゃいない状況の中で、俺の目の前で、傷ついた瞬間を見た俺の目の前でまで、笑ってんだ。ちょっと待てって、ここでようやく気付いた。
瑞穂をもうしばらく見つめていた。瑞穂と目が合う。笑いかけてくるけど、笑わない俺を見て、『あぁ、気付かれちゃったなぁ』と言いたげな表情で、困った顔で、瑞穂が笑った。
俺は、自分の近くに四色全て揃っている場所でずっと待っていた。瑞穂が近づくまで、ずっと足踏みをするみたいにして待った。
「隆君、前に進んでください」
「……」
「置いてっちゃいますよ？」
「……」
これは、賭けだと思った。次に出る言葉で、賭けをした。これは多分、いや、絶対、俺達二人共にとって、賭けだ。
「……」
「……」
二人ともが、何も言えない、言わないままで、見つめ合っていた。何分そうしているのかわからなくなった頃に、ふふっ。瑞穂が吹き出した。
「なぁ、瑞穂」
と俺が話しかけると、
「初めて出会った時の事、覚えてますか？」
瑞穂は質問をぶつけてきた。
「あ？　あー。『あんた以外に誰がいるってんだ』って奴だよな」
「ブッブー。違いますよ」
瑞穂の言葉は即答で、また裾を摘まれる。
「はぁ？　んじゃいつなんだよ」
俺が答える。また、次の色を踏む。

「このゲームのルールの説明、私が一番最初に聞いたんです。敬一郎君よりも、先に。私が」
瑞穂が次の色を踏む。俺の番だって、先に進んでくれって、目が合図を送ってきている。
「……それって、まさか」
大きな一歩で次の色に進む。その更に次の色の為に、稼いでおかないといけなかったからだ。
「そうですよ。小学校の一年生歓迎遠足の帰り。二年生と組んで一緒に帰る時、隆君は一年生、私は」
瑞穂も精一杯に大きく踏み出して、そして着地と同時に、
「二年生、でした」
笑って、言った。
「当時から隆君は大きくて、この子は私よりも更に大きなお兄さんだって、思いました。それで、一年生だって、知って、そして更に私が面倒を見ることになっているって知った時には、本当にびっくりしちゃいました」
俺が一歩進んで、また瑞穂が進む。
「マジ、かー……」
当時の記憶が、蘇ってくる。二年生にしては小さいよなこいつ。そう思った相手が、今こうして目の前にいるなんて、なー。もう既に引っ越してしまって、もしくは、いてもとうの昔に記憶から消えてなくなっているもんだと思っていた……。
「隆君は今もあんまり変わっていません」
瑞穂はぴょん、と飛んで、言葉を続ける。
「年上の私に対して全然笑ってくれないし、あんたみたいなチビが二年生かよ、とか平気で言ってくるし、私の事お姉ちゃんとかって呼んでくれるかと思っていたら、名前ですらも呼んでくれませんでしたからね。私、悔しかったです。あの時」
「えーっと、それは、すんませんでした」
頭を掻いて俺が謝ると、瑞穂はクス、と笑った。
「そしてこの遊びのルールを自慢気に私に解説してくれました。そして一緒に遊んでやっても良いけど？　って」
「うわ、上から……」
当時の俺やばいな……。これ相手が瑞穂じゃなかったら色々危なかった……。
「さすがに私も少し腹が立っちゃって、よし、絶対勝ってやるって、気合いを入れて臨みました。あぁ、そうですそうです。マンホールは、乗ったら落ちて死ぬって、言ってました。……ひゅーん、て」

瑞穂は思い出し笑いをしながら、そう言った。踏み出す。その足は、敗着の一歩、だ。その方向で進むと、間違いなく、詰む。

でも、待ったはなし。やり直しが効かないのが人生だ。そんな妙な上から姿勢の俺が作ったルール。もう、どうしようもない。

「隆君。私に近づく様に動いてくださいね」

珍しく、瑞穂が俺に指示を出した。驚いたけれど、それに従った。

空は夕焼け。もう、雨は降らないだろう。不思議な安堵が、あった。

「マンホールに頼らなくても、ここまで辿り着きました。あの時も」

「嘘だろ？」

それはない、と思った。瑞穂は笑って、

「はい。実際は何回も落ちたり手詰まりを起こしたりして死んでました。私達」

マンホールを避けながらも、とりあえず戻ってみたり、色の順番を変えたり、その地帯にない色は飛ばしたり。中々強引なルール変更をその場その場で繰り返して、俺達はここまで辿り着いたらしい。子どもの考えそうなこった。いや、かつての俺なんだけど。

「けど、ここで私が詰まってしまったんです」

瑞穂が立っている場所は、白鷺が降り立つ菜の花畑の花の色。次が白でなければ、詰み。そして瑞穂の次の色は、青。この地点で言うなら空の、青。

「私、負けるの嫌だーって、そう思いました。きっと隆君は二年生に勝ったーって、喜んでしまうと思って、私は泣きそうでした」

俺は懸命に飛んだ。次の俺の色は黄。そして次は白。更に青と続く。ここでようやく瑞穂の意図に気付く。

「隆君。今度は私を助けてくださいね」

瑞穂が笑って、俺に向かって両腕を伸ばした。

思い出した。俺は、あの時、このゲームは二人揃って生き残んないといけないゲームなんだって言って。だって、勝ち負けを競うゲームじゃなかったから。どうにかしてあの二年生を、瑞穂を助けようとした。そして、彼女を抱きかかえて青に持っていこうとしたんだ。そして、――失敗した。

見かけによらず体力も力もない俺は、彼女を支える事ができなかったのだ。見事に潰れて、その拍子に彼女の膝に擦り傷を作らせて、そして泣かせた。

「ルールをまた変えて進めば良いよ」

と彼女は泣きながらもそう言ったそうなのだが俺がそれを拒んだ。だって、二人揃ってないといけないから。二人揃って、生き残んないと、願いは叶わないから。

「明日、天気になりますように」

瑞穂を抱きかかえて、先に白に俺が飛んで、瑞穂を青色の中に、空の中に降ろす。
「その願い、今度は叶えましょう」
瑞穂が笑った。ゴール地点は、もう目の前だった。
保育園に通っていた時から、謎が謎を呼ぶ不思議なお店があって、看板を見れば駄菓子屋。なのに、何故か自動ドアで、しかも店はガラス張り、何と言うか、風情もなけりゃ美的センスも無い。幼心にもこの店はへんてこりんだ、と誰もが思う。
もっとへんてこりんなのは、この店は駄菓子だけじゃなくて、バイクや原チャリも売られている。自転車はない。もはや何屋なのか相当理解に苦しむ。看板は駄菓子屋。でもバイクの店っぽい。あ。あと野菜とか酒も売ってる。飲酒運転は犯罪だというのに。
そのお店は、国道の太い道路を渡る手前、右手側にある。俺はこの交差点を左に曲がる。敬一郎と絵梨は右に、そして、瑞穂だけはこの国道を渡って真っすぐ進んで家に帰っていく。この店は、このゲームのゴール地点を示す、昔から何も変わらない目印だった。店が見え始めてから先に難所はない。ここまでで詰んだり、飽きたりしてゲームをやめてしまうことがなければ、もうゴールは確約されたようなもので。
「明日は、晴れますね」
赤い花から、無機質なアスファルトへ飛び移った瑞穂が、言った。
「どうだか。こんな天気予報当てになりゃしねーよ」
テレビのもっと当てになる天気予報曰く、明日も天気は下り坂なのだそうだ。思い出す。
「いいえ。きっと晴れます」
傘をあえて開いて、瑞穂が呟いた。それは何かのまじないみたいだと、俺は感じた。
「私、わかっていました」
唐突に切り出された話題に、俺はまた、
「……え？」
くらいのことしか返せなかった。
「新しいお母さんが私と仲良くしてはくれないだろうこと。それにお父さんが私を家の中で守ってはくれないだろうこと。私、ちゃんとわかっていました」
瑞穂は俺に背中を向けて言った。傘が邪魔で、背中から上が見えなくなってしまっている。
「私、わかっています。旭君と仲良くする事も、もう無理なんだって事」
瑞穂の声は続く。
「……」
俺は、沈黙していた。
「でも！」

急に瑞穂は声を張り上げた。幸い、国道は車が走っていくだけで、歩行者の姿は俺達以外になかった。まるで田舎とはいえ、ちっとは拓けてきた場所だというのに、俺達だけが迷い込んでしまったみたいな空間。少し面食らった形の俺は、まだ何も言葉を発する事ができないまま、瑞穂の言葉の続きを待つ格好になってしまった。

「明日は、晴れるんです。……隆君のお陰で、明日は、必ず晴れます。それで、良いんです。だから」

一呼吸の後、瑞穂が振り返る。

「また明日！　です」

笑顔で言うのと同時に、左側。俺が渡る方の信号が、青になった。

その信号を、俺は生返事だけしかできないままに、渡ってしまって。

でも渡ってすぐ、俺は瑞穂を見る。

傘が広がっていて、背中が見えない。顔が下がっているかどうかも、わからない。

でも、たぶん、いや、絶対。そうだ。――信号は、赤。

国道の信号機を待つ瑞穂の傘。その傘が、――くるくる。くるくるくる――。

間に合え！　と心の中必死に叫んだ。その傘が回りきってしまえば。五秒経ってしまったならば。――クラクションと怒鳴り声が聞こえたけれど、気にしたりしない。気にする猶予なんて、どこにもありはしない！

瑞穂は、笑ってしまう。笑ってしまうんだ。悲しくて、どうしようもなくて、泣きたくてたまらなくて。でも嫌われたくなくて。好きでいてもらいたくて。そういう気持ちも、全部。隠れてしまうんだ。全部。

あぁ、あの時叫んだあの言葉。私も、嫌いです！　あれは、絵梨に返したんだと、ずっと思っていた。だけど、違う。違った。あれは、

『そんな私が、私も、嫌いです！』だったんだ。あぁ、俺は何てバカなんだ。今更気付くのかよ。今まで気付かないままでいたんだよ！　待ってくれ。あっという間に息が切れる。歌う時には不思議と保つはずの息が、こういう時に限って保たないんだ。あぁ、待ってくれないか。隠してしまうその前に、笑って、全部を許してしまう、その前に――。

隆、君……？　そんなびっくりして、声がつまったんだろう。そんな感じで、おっかなびっくりした瑞穂の声が、聞こえた。瑞穂の背中が、暖かい。目の前の、何を売っているのかよくわからない――看板を見る限りでは、多分駄菓子屋――お店のガラスに、俺達の

姿が映っている。瑞穂の背中に、抱きついている、俺。抱きつかれている、瑞穂。
「え、えっと……」
瑞穂の困った声が聞こえた。目に、涙が浮かんでいるのが見えて、良かった。……間に合った。そう思った。
「ごめん。重いよな」
「え、は、……はい。ちょっと、だけ……。でも……！」
「でも？」
「もうちょっとだけ、こうしていてもらいたい気も、します……」
マジかよ。と思う。というか、それは思うだけで留める事ができなくて、言葉として漏れてしまった。
「はい……。マジ、です……」
お前もお前で素直だな。でも、それよりも前に。
「良かった……」
「え？　何がですか？」
瑞穂はそれが理解出来なかったみたいで、きょとんと俺に尋ねてきた。
「いいや。こっちの話だよ」
少し笑ってみせて、周囲に見せない様に、見られたりしないように瑞穂の傘をたぐり寄せて、俺は体を沈めていく。二人の背中を隠す様にして、相合傘が完成する。雨は完全に上がっていて、傘をさす二人の姿は浮いている。人が少しずつではあるけれど増えてきた。だけど、気になんてしない。
愛おしい、なんて言葉がわかったのは、これが初めてだった。俺は改めて、瑞穂の体に触れて、そして――。

七・手紙

――新しいアルバム、全て聴かせて頂きました。
「ありがとうございます」
――その中でも一番印象に残ったのは、月並みで申し訳ないんですが、やっぱりアルバムの表題にもなっている楽曲ですね。でもどうして天気予報士、なのでしょう。気象予報士、ではいけなかったのですか？
「あの唄は……、一種の手紙、ですかね。あ、タイトルにあるか」
――そうですね（笑）。
「うん。で、そう。瑞穂って変な癖があって、あいつ、嫌な事とか悲しい事とかあったら、五秒くらい下向いて、そしてすぐ顔を上げて笑うんです。最初見た時とか、ほんとこいつ

何やってんだろって、そんな風に思ったんですよね。雨が降ってる時なんか、傘をくるくるって回してから顔を上げて笑う。一体何なんだろうって思って聞いてみたら、自分ルールだって、あいつ答えるんです。傘をくるくる回したら、もう全部受け入れられる世界になるって。嫌な事を言った人は、きっとイライラすることがあったんだ、と。もしかしたらもっと良い私にするために、私のために言ってくれたんだ。嫌な事をする人がいても、それもやっぱり同じ。傘をくるくるって回す方が正式で、屋内とか、晴れた日にも最初は一々傘を使ってやっていて、『あの子は変な子だ』と言われたりもしたそうです。そして、そんな生活を物心ついた頃からずぅっと、ずーっと、続けていたんだそうです。当時の俺達は、気象予報士って言葉を知らなかったんです。

この唄は、そういう人に、そういう滑稽な奴に向けた手紙なんです。それも、俺が言いたい事を言うだけ、伝えるだけ、叫ぶだけの、そんな乱暴な手紙なんです」

――乱暴、という感じを私は全く感じられなかったのですが、なるほど、そうだったんですね。

「えぇ。乱暴ですよ。何せ、瑞穂はこの唄の背景を聞いていませんし、あと、このインタビューの仕事を俺が受けた事っていうか、話が来た事自体話してませんし（笑）」

――えー。じゃあうちの雑誌瑞穂さんが見たらビックリしちゃうんじゃないですか？

「えぇ。だからうちには置きませんよ。この号だけは手に入らなかったってことにしてとぼけ続けます（笑）」

――え？　じゃあ送りますね？（にっこり）

「いやいや。すみません。処分しときますね」

――酷いなぁ（笑）。うち結構シードルさんの特集組んでるじゃないですかぁ。

「えぇ。感謝しています。でもそれとこれとは話別っス。恥ずかしいじゃないですか。汲んでくださいよ、ね？」

八・かなう話

結果だけを話すと。それは本当にトントン拍子のサクセスストーリーに成り下がってしまうから、だから少し不本意に思う事がある。だからといって、もっと大きな苦難が待ち受けていれば良かったか、と問われたりしたら、それはノーだ。

正直言って、ギリギリだったんだ。

中学生だった俺達に、一般の部でコンクールに出場して何らかの賞を取らないと、高校で音楽を続けることを許さないと敬一郎や絵梨の両親から言われた事だとか――グランプリは即メジャーデビューっていうこともあって毎年熾烈な争いになるコンクールだ。実質、オーディションだ――。

俺にとっては余裕だったが他の三人にとっては鬼門である南稜高校――ちなみに偏差値は五十だ――に全員揃って合格しなくちゃ音楽は続けられないだとか。

旭のこともあって瑞穂にはとっとと出て行ってほしい、とのたまう瑞穂の両親と、瑞穂の身の置き場についての問題だとか。

当然俺達だけじゃなくて、敬一郎や絵梨にだって問題があった。でもまぁ、今はそれがメインじゃない訳で。だからそこら辺はまたの機会に本人達に聞きなってことで、俺は話を切り上げるつもりだ。

どうにかこうにかこうした問題を全て解決して、高校の時に再度出場した同じコンクールでグランプリに輝き、俺達はデビュー、そしてありがたいことに様々な場所でライブができるような立場にまで成ることができた。

定期的に先生にはライブのチケットを送っている。中学生の時分、教師という立場の人間を先公と呼び捨てるのはデフォルトだったけれど、先生に対してだけは先生と呼べる。そんな先生だった。

だけど、何度誘っても、丁重な断りの手紙が届くだけだった。瑞穂の一回目の中三の時の担任にも送っていて、その先生は来てくれている。偶然だが、その先生は百合神先生のことを知っていて、

「あいつはねー。『人から受けた恩は一生忘れるな。人に与えた恩はすぐに忘れろ』が金科玉条でね。……よっぽどのことが無い限り、受け取ってはくれないわよ」

と俺達に話してくれた。

「別にあんたらのことが嫌いだって訳じゃないんだから、そんなしょぼくれた顔してんじゃないの」

とは言うものの、それはやはり寂しいと思った。

そんな先生だったが、ついに来てくれることになった。ついに俺達の気持ちを、チケットを、受け取ってくれたのだ。そう伝える手紙には続きがあり、その内容はというと、

「君達のファンだっていう子を二人連れてくる。色々背負っている子達で、きっと君達を見て、話をすることで救われたり、励まされたりすることがあると思うんだ」

というものだった。なるほど、よっぽどのこと、というのがあるのだろう。何か力に、なれるだろうか。

そんな風にして、そこから俺はずっとその子に何を話そうかを考え続けていた。

先生の手紙にはその子達の情報がびっしりと書き付けられていて、男の子は俺が。女の子は瑞穂達三人が合うかな、という結論に至った。

俺達も、先生にどうしても伝えたいことがあった。手紙ではなく、直接。

俺達、結婚します。

たったそれだけのこと。それだけのことを、俺達は伝えたかった。

当日、ライブ前にさっさとその報告をしてしまう予定だったが、先生達が見事に遅刻した。

「うん。……ゴールド免許っていうのは実に容易く取れるんだ。良いかい？　免許取るだろ？　八年間神棚にお供えしておく訳さ。その後もな？　ずぅっと神棚んとこに供えて、ありがたやー。ありがたやーって唱えるとな？　すげぇことに、輝きだすんだぜ？」

サムズアップしながら垂れ流される言い訳が小学生レベルだ。流石先生だ。どうしよう。ライブ前だっていうのに俺、キレそう。

そんな俺を瑞穂がなだめながら、ライブ後に時間を取る約束をして、俺と先生達は別れた。

ライブ後、まずは約束通り俺は結構思い詰めたような顔をしている男の方の教え子を外に連れ出した。女の子の方は、そのまま控え室の中、三人と和気藹々やってくれればそれで良い。先生は、この時間俺達の間に姿を現さなかった。二人を控え室に連れてきたら、厠行ってくらぁ、と言い残して姿を消してしまった。

話をして、握手をして。先生の話を聞いて。色々としていたら、もう俺達も出て行かないといけなくなって。かなりバタバタしてしまう。先生はさっさと二人を連れて帰ろうとして、それを、

「先生！　待ってください」

瑞穂が呼び止めた。

「また後でで良いだろ？」

先生が言うと、

「今じゃなくちゃダメなんです！　私と隆君、結婚するんです！」

ドサクサ紛れに瑞穂は一息に言った。あーあ。こんな言い方、するつもりなかったのになぁ。

「……そう、か。ん。まぁ幸せになりなさい」

先生はそれだけを言って帰ろうとした。

「待てよ。俺達さ」

ドアの所、俺は立ちふさがるようにして先生を呼び止めた。

「俺達、さ。もう少ししたら子供も産まれるんです。落ち着いたら、結婚式もするつもりで。だから先生、その時には仲人、やってくれませんか」

「お願いします！」

間髪入れず、瑞穂も頭を下げる。

「お願いします！」
敬一郎が、頭を下げて、
「やったって下さい。先生！」
絵梨が、頭を下げた。
「……」
先生はしばらく沈黙して、不意に俺の腕を引っ張り、瑞穂の傍に押しやる。そして、
「叶わないと、思っていたんだ」
そう言いながら、俺と瑞穂、二人をまとめて包容していた。
「そういう風にさ、教え子同士で好き合って、その結婚式で僕が仲人とかするの。きっと叶わないって思ってた。……だってさ、僕は。……僕は、そんなに皆が思う程、立派な教師でもなくて、人間でも、ないから。あぁ……、生徒もいる前でみっともない。でも、叶うんだな。こんなことって……あるんだな……。嬉しいよ。本当に……嬉しい」
先生は俺達を抱きしめながら、泣いていた。そんな風に、喜んでくれると、まして、泣いてくれると思わなかったものだから、俺達まで、一緒に泣いていたんだ。
何だろう。先生の傍にいると本当にドラマみたいになっちまって。本当に不思議な気持ちになる。
「……あのー？　えっと、そろそろ、よろしいでしょうかー？」
定刻を過ぎていることを伝えにきた会場スタッフが、抱き合い泣きじゃくる俺達を見てぽかーん、としていらっしゃる。
「……」
「……」
「ま、まぁ、良い落ちがついた、ってことで。それじゃな」
我に返った先生がそう言って軽く顔をハンカチで拭い部屋を出て行こうとする。
「どーでも良いっすけどその顔今までん中で最っ高の汚さですわ」
隆君！　と瑞穂は俺を責めるが、
「お前もなー！」
程度の上では先生だってそう変わりはないなと思ったりもする。

九・かなわない話

時期的には、今年の冬の話だった。色々と酷いオチはついちまったが、先生に結婚の報告をして、その上で俺達は役場に婚約届を提出し、軽い会見なんかをしてから、宮ノ訪に戻ってきた。
厳密に言うと、入院先は宮ノ訪ではなくその隣の蒲原という場所だ。別に入院先は東京

でも良かったのだけれども、丁度こっちに残って医者になった中学時代の友人がいて、しかも専門が産婦人科だっていうこともあったから、俺達はこちらを選んだ。
「しっかしアンタら、これじゃできちゃった結婚とか言われても文句言えへんで」
と、一言一句全て同じくお袋と絵梨の両方に言われてしまった。まぁ確かにそれはその通りなのだが。
一応、プロポーズをして、婚姻届を書いて、先生を除く周囲に報告をしていって、それら全てが一段落してから瑞穂の妊娠に気付いたので、順番としては間違ってはいない、というのは言い訳か。
報告と言えば……瑞穂の両親、だが。結婚の報告の為に直接家に立ち寄った。これは、当然やらなければいけないことだと、逃げてはいけないことなのだとお互いに覚悟を決め合ってから、インターホンを押した。
「へぇ。それで一々報告を？　ふぅん」
「何も渡すものも言葉もないが、好きにすればいいさ」
という言葉だったので、
「えぇ。俺達もこれで筋は通したってことで」
それだけを言って、早足に瑞穂の形跡のない実家を出て行った。
ま、端から期待はしていなかったさ。そう笑顔で言ってやってそのすぐ後、そんな俺の笑顔に答えようとした瑞穂が戻したことがきっかけで、妊娠に気付く、そんなドタバタ劇もあったっけ。
まぁとにかく……。俺はここのところに立て続いた諸々が頭の中を駆け巡り、雑然としてまとまらない。季節もいつの間にか夏の直前にまでなってしまっていて、先生の教え子達ももう中三になっている。あまりの時間の流れの速さに、呆気にとられてしまう。
「隆君、今すっごく変なこと考えてます」
瑞穂からそんな指摘を受けてしまう。
「へ？　いやいや。俺今そんなこと考えてるように見えっか？」
瑞穂は黙って頷く。
「深刻そうな顔をしているかと思えば突然笑い出したり、泣きそうになってたり、すっごく変ですよ。疲れてませんか？　もし疲れてるんだったら無理しないで……」
こらこらこらこら。俺は言葉を挟んで瑞穂の発言を止める。
「お前以上に疲れる奴はいねーだろって。俺はもうホンットに余裕だから。だからお前はゆっくりしていろ」
「本当ですか？」
と不安がる瑞穂を見て、俺もふと不安になる。瑞穂は体が弱いんだ。歌えるくらいにま

で回復したとはいえ、体自体の弱いのは、変わらない。高校時代も、学年で一番欠席、早退の数が多かった。進級が危ぶまれるギリギリになってしまったこともあって。
そんな感じの体だから。医者からも妊娠、出産は勧められなかった。
「いざという時、その時は母体を優先するぞ」
蒲原の診療所、医者の一人として勤務する友人は俺にだけ、ぼそりと伝えていた。
あぁ、本当にそんなことがあったら、いや、そこさえ突き抜けて、最悪の事態にまでなってしまったなら。もしも彼女が誰も手の届かぬ遠い所へ逝ってしまったら。それを考えると、不安で仕方が無かった。
「……大丈夫、さ。だから、お前は、な？」
瑞穂の体に布団をかけてやる中で、俺は笑顔を作り、呼びかけた。これくらいしか、俺に出来ることはないから。せめて、笑っているだけのことくらい、しよう。
「隆君が新しく作った唄、聴きました」
瑞穂が俺の方を顔だけで向いて、話しかけてくる。
「ん？　新しい唄って、……いやいや、まさか。おい」
「ふふ。そのまさか、ですよ。隆君。私は隆君のことなら何でもお見通しなんですから」
その手には飴玉が握られている。不安に駆られて、
「そんなことが本当に起こってしまったら」
という思いに駆られて作ってしまった唄。あまりに恥ずかしくて人前には出せないなと思いながら、消せなかった唄だった。
「私も、です」
「え？」
やばいぞ、これは恥ずかしいぞ、と思いながら瑞穂の言葉を聞いていた俺は、少しだけ意外な声を発した。
「私も、隆君が大好きで。失いたくなくて。離れたくない。です。永遠、っていうのも、あったら良いなって、本当に思います。そして、それがあり得なくて、そして本当に、どちらかが先に……」
死んでしまう。消えてしまう。そんな言葉が続くのが嫌でたまらない！
「そんなのはずっと先の事だ！　ずっとずっとずぅっと！　もっと！　お互いにやりたいこととかさ、そういうの、やり終わってさ。悔いの残らない人生になってから、……そうだろ？」
その怖さに押しつぶされそうになりながらも、俺は瑞穂に笑顔を向けようとして、少しだけ目を潤ませている。
「えぇ。きっとそうですよ。……私、強くなったんですよ」

俺の目の辺りを拭いながら、瑞穂はまた、俺を許すように微笑んだ。その笑顔が朧げにさえ映ってしまって。俺は、ただただそれが儚く消えてしまわないように、それだけを願っていた。

「隆君は、本当に昔から変わらないですね……。昔から、本当に強くて、優しくて」

瑞穂の手を握り、俺はその言葉を否定する。俺は強くないんだって。優しくなんかないんだって。今も、お前が消えないように、死なないようにって、そればっかりを、自分の為に祈ってるんだって。

瑞穂は、笑っていた。

「そうだ。隆君。あの手紙は私に向けて書かれていて、あの日の私を励ましたいって思っている、って隆君は言ってましたね。でもそれは嘘です。天気予報士は隆君で、隆君は自分に向かって手紙を書いたんです。私のためでなく、自分のため。でも、それも嘘です。大嘘なんです」

瑞穂は体をゆっくりと起こして、続けた。

「本当はやっぱり私に向かって書いているんです。どっちでもないよって顔をして、俺の為なんだって言ってるようでいて。……それが、隆君の優しさですから。私、隆君のこと何もかもお見通しなんですよ。ベッドの下を見ていただけますか？」

言われるがまま、俺は体を屈めてベッドの下を見る。そこには内緒にしていたはずの俺のインタビューが掲載された雑誌が置かれていた。

「嘘だろ……誰に聞いたんだよ」

思わず口を吐いて出た本音な訳だが、

「何度でも言いますけど私、隆君のこと何もかもお見通しなんですよ？　誰に聞かなくても私に内緒で仕事していることくらい、私わかってますから」

ドヤ顔で勝ち誇る瑞穂だったが、不意に俺の手を掴み、

「田中君、いや、田中先生に何を言われたかも、わかっています。でも、体が強くない私は、お母さんになるって気持ちで、強さで、この子を産むんです。隆君。私は……」

「わかってるさ。……わかってる」

瑞穂の手を握りしめて、俺は目を瞑って思った。あぁ全く。本当に、敵わない。

十・最後の話

産まれてくる子はでかかったりするんだろうか。四千グラム、いや、三千でも瑞穂の体には負担が大きいように思えて。

私、強くなったんですよ。

彼女のそんな言葉が、本当のことだと思えるのと同時に、不安が度々頭をもたげる。

「瑞穂が、手の届かない場所へ行ってしまわないだろうか」
聞き飽きる程に。
そんなんだから、そんな感じだから。
「……」
「……」
「あの……」
「……」
「隆君！」
「わ、うわ！　わっ……え？　おう。……何だ？」
「ずっとボーってして。隆君疲れてます」
「い、いやぁ……。そ、うか？」
「……」
瑞穂の心配そうな目線。こんな羽目になっちまうんだ。
俺が心配されてどうすんだ。そう思って俺は、
「あの時の逆パターンだな」
九年前の春に赴任して来て、俺達を引き合わせてくれた百合神先生が色々と高説垂れてる間のやり取りを思い出しながら瑞穂に話しかけた。
「え？　……ああ！　そういえばそうですね」
瑞穂はその時のことを思い出したようで、笑顔でそう答えた。
「あの時は、あ、あの子の隣にいるんだ、私の事覚えていたりするのかな、とか。色々考え過ぎててボーってしちゃったりして。隆君のこと困らせたり、怒らせたりしちゃいました。えへへ」
「大した事ねぇよ。つか、俺は物の見事って感じに忘れてて。悪かったなー、とか」
「いえいえ。私はそれくらいで十分なんです。そんな悪いなんて思わないで……」
「くぉーら」
かるーく睨んでみたりする。すぐに笑ってみたりする。
「お前は俺の中でどれだけでっかい存在なのかってさ。もう何回も言ってやったじゃねーか。また説明しなきゃいけないのか？」
「い、いえいえ！　……いや！　今のは説明されるのが嫌だって訳じゃなくてですね！」
そんな必死の弁解が面白くて。
「……。ぷ。くくっ！」
思わず笑う俺と。
「……むぅ」

思わず剥れる瑞穂。
「私の方が年上なんです。姉さん女房ですよ」
「悪かったって」
そして愛おしくて。
俺は反省の言葉もそこそこに、瑞穂の側に座り、その胎内で居心地よく眠っているであろう存在に思いを馳せる。
公立の中学校だというのに留年を食らい、一年後輩である俺と同級生になっちまって、そしてそこから立ち上がって、ここまで来た彼女と、俺達の一つの答えを見て、あの時よりかは自然に俺達の唇は寄せ合わされた――。
「これからも、幸せでいような」
「はい。……三人で、一緒に――」

了